

2026年度(総合型選抜)AO選抜入学試験

産業社会学部「産業社会小論文方式」

< 特色ある活動と学びを深めた皆さん対象 >

1. 実施状況

(1) 志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻等	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
現代社会学科 現代社会専攻	72	28	22
現代社会学科 メディア社会専攻	25	10	7
現代社会学科 スポーツ社会専攻	39	11	7
現代社会学科 子ども社会専攻	22	8	5
現代社会学科 人間福祉専攻	49	21	14
計	207	78	55

(2) 本入学試験の目的

産業社会学部では、以下のような資質を備えた人物を求めました。

- ① 本入試出願以前に、積極的に何らかの活動に取り組み、それを通じて優れた問題意識を形成している者。
- ② 達成すべき目標を自ら具体的に定めることができ、それを達成するために積極的で持続的な努力ができる者。
- ③ 入学後、本学部において優れた学業成績を収めるとともに、諸活動においてリーダーシップを発揮することが期待できる者。

2. 試験内容

(1) 第1次選考

第1次試験では小論文試験を実施しました。

小論文試験では、今井悠介氏の『体験格差』から、日本の未成年者における体験格差の現状と、親世代における格差からの世代間連鎖の可能性に関する箇所を中心に出題し、80分間の試験時間の間に、この論文に関する3つの設問への解答を記述するよう求めました。問1と問2は、それぞれの論文の内容を正確に読み解くことができているかどうかを試すものであり、単に論文の内容をまとめるだけではなく、設問で求めた条件に沿って解答することを要求する問題でした。特に問1については、図やデータを正確に読み取ることや、読み取ったデータから特徴を正確に抽出できるかなども問いました。問3は、論文の内容を踏まえつつ、受験生自身の意見を論理的に論述・展開することを求めました。

また、書類として提出していただいた調査書やエントリーシート、課題論文を確認し、高等学校等における3年間の学業の達成度、ならびに本学部の設定するアドミッション・ポリシーに掲げる資質について審査しました。

(2) 第2次選考

第1次選考合格者に対して約20分間の面接試験を行いました。

面接では、2名の面接担当教員が受験生に対して、高等学校等での特色ある活動と学びの実績をふまえて、志望動機や問題意識、入学後の勉学についての見通しや目標について質問しました。

3. 出題の意図

(1) 第1次選考

小論文試験では、入学後に産業社会学部で優れた学業成績を収めるために必要な、基礎知識や読解力、論理思考の展開能力、総合的に捉えて本質を解明し、展望を見いだしていく力、および、ものごとの本質を捉えることで展望を見いだす力を審査することを意図して出題しました。

書類は、高等学校等での正課・課外活動を通じて、大学での学びにつながる問題意識を明確に形成できているかどうか、その問題意識が産業社会学部の各専攻での学びに合致しているかどうか、産業社会学部でどのように学んでいくのかの見通しを示すことができているかどうか、という各点について確認しました。

(2) 第2次選考

個人面接を通じて、以下の各点を問いました。

- ・産業社会学部・各専攻への志望理由。
- ・受験生の問題意識と産業社会学部で学びたいテーマの関連性。
- ・産業社会学部での勉学への意欲、積極性、目標の明確さ。
- ・応答が的確かどうか、積極的に何らかの活動に取り組み、優れた問題意識を形成することを通じて、他者との協働を含めたリーダーシップを発揮できる見込みがあるかどうか。

4. 評価のポイント

(1) 第1次選考

小論文試験では、3つの設問のうち、問1と問2は設問文で提示した条件に合わせて論文の内容を要約することを求めました。論文の文章や図表を正確に読み取ることができていること、設問の求める条件をきちんと踏まえて要約することができていること、指定された文字数の中で重要なポイントを漏らさず、簡潔に整理・表現できていることが評価のポイントでした。問3では、論文の内容を踏まえて受験生自身の意見を展開することを求め、自らの考えを、論理立てて説得力をもって提示することができているかどうか、それを論文の内容と関連づけることができているかどうかを審査しました。

書類では、調査書・エントリーシート・課題論文について、学業の到達度、アドミッション・ポリシーで示した本学部が期待する資質について確認しました。特に、受験生自身が正課・課外活動で、どのような経験をしたのか、その経験を通じてどのような問題意識を抱いたのか、その問題意識が産業社会学部での学びにどのように結びつくのか、といった点について明確かつ具体的に書かれているかどうかを確認しました。

(2) 第2次選考

出願書類である調査書・エントリーシート・課題論文に基づいて、口頭での質疑を行いました。評価のポイントは以下の各点でした。

- ・受験生自身の問題意識を明確に表現できているかどうか。
- ・その問題意識と産業社会学部の各専攻への志望理由との関連が明確であるかどうか。
- ・入学後、何をどのように学びたいのか、勉学の目標を示すことができているかどうか。

5. 解答状況

(1) 第1次選考

小論文試験で出題した問1と問2は、多くの受験者がある程度の正答に達していました。問3では、自らの考えを、説得力を持って論理的に展開することができているかどうかで評価に差が生じました。なお、記述試験では判読できない極端なくせ字や不正確な漢字は減点対象となります。また字数指定がある場合、字数不足や字数オーバーも減点対象になるので注意して下さい。

書類では、特色ある活動や学びとして志願者がアピールした内容は、国内外でのボランティア活動や地域貢献活動、クラブ活動など多岐にわたっていました。こうした活動を通じて明確な問題意識を育むことができているか、その問題意識を産業社会学部の各専攻での学びに結びつけることができているかが重視されました。

(2) 第2次選考

これまでの学びや活動を通じての体験から、どのような問題意識を抱いたのか、その問題意識を出発点として入学後どのようなことを学びたいのか、さらにどのような目標や将来の展望を持っているのかといった点について、自らの言葉で具体的に説得力をもって語る事ができる受験生が高く評価されました。

6. 次年度の受験生へのアドバイス

本入試では、高等学校等での活動や体験そのものが評価されるのではなく、そうした経験を通じてどのような問題意識を育んだのか、その問題意識をもとにした産業社会学部の各専攻で学ぶ意欲と見通しの明確さが審査されます。大学での学び、さらには将来の目標や生き方にもつながる問題意識や方向性のアウトラインを明確にしておくことが重要です。そのことについて、高校生活や日常生活のなかで、他者(家族・先生・友だちなど)との関係のなかで緩やかに実践することが求められます。

そのためには、日頃から社会で起こる様々な出来事(ニュース等)に注意を払い、新聞や本を読むことで社会の動きに目を向け、それらに対する自らの意見を考えることが必要になります。これは小論文試験対策としても有効であることはもちろんですが、自らの考えを明確にかつ独りよがりになるのではなく、社会情勢にも関連づけて客観的に論理立てて提示する訓練にもなりますので、面接試験対策としても有効です。

また、自分以外の他者に対する意識を持ち、他者との議論を通して共通の目標をつくったり、喜びなどを共有したりすることができる活動への参加も、高校生活の中で積極的に行うことも重要です。そのように集団のなかで自分を磨くことによって、事の本質を見抜くことだけではなく、自分の目標の価値を面接試験で自分の言葉で生き生きと語れるようになります。

なお、このAO入学試験では、受験生が学びたいと考える内容と、産業社会学部で実際に行われている学びとの適合性も審査の対象となります。制度的な仕組みや名称などの表層だけでなく、産業社会学部でどのような教育が行われているのか、その内容をしっかりと理解してください。また、どのような教員がどのような研究テーマに取り組み、授業を行っているのかについても十分に調べたうえで、試験に臨んでください。

以上